

広島俳句倶楽部

令和四年四月作品集

根雨神社と野蒜

高尾ひとみ

根雨神社は、鳥取県にある神社です。その名前の謂れの一つとして、元明天皇の在位（七〇七―七一五）に旱魃があり、社で雨乞いをする雨が降って豊作となったことから、根まで潤す「根雨」という地名になったといわれています。大きな神社ではありませんが、美しい木村で丁寧に作られ、大切にされている社でした。

社の周囲は、春とはいえまだ寒い山里です。土手の野草を引くと一本がたやすく抜け、調べると野蒜でした。また採ろうとすると、葉がちぎれるだけで白い球根が採れません。野蒜は、振るものとなりました。

藪椿川がうがうと流れをり

川沿ひの道に聞きたる初音かな

霞みたる空に鶯の高く飛び

崖下に六地藏あり雪残る

根雨といふよき名の社馬酔木咲く

糠雨の降りつづきたる芽吹かな

奥日野の土手に掘つたる野蒜かな

路の藁畔の横には川流れ

連山の芽吹や朝日いつせいに

花菜見て短き旅の終りけり

《作品鑑賞》

あざみ

鳥取県の根雨神社周辺を吟行した句をまとめておられます。初春の長閑な風景を丁寧に写生され、さまざまな物と向き合っておられるお姿が目につかびます。私も一緒に暮らして頂き、傍に居るような感覚を覚えました。

川沿ひの道に聞きたる初音かな

急に春めいてきた川沿いを歩いていると、折から近くの藪が立木に鳴く鶯の音が聞こえてきた。その時の感嘆した様子が伺える。

根雨といふよき名の社馬酔木咲く

高いところにある神社。白い花馬酔木が咲いている。この地域を巡ってこられた回想もあり、目の前の景だけでなく、古い歴史のある根雨地区に対する挨拶句でもある。

奥日野の土手に掘つたる野蒜かな

野蒜は春の雑草で、葉は細長い管状、根は白く辣蓼に似ている。少し茹でて酢味噌で和えて酒の肴にする。初めてで残念。たくさん掘りたいですね。

花菜見て短き旅の終りけり

見渡す限り菜の花畑が広がっている。この地を去りがたい気持ちと充実した旅に満足している様子も伺える。

霜強く眞金に朝の来りけり

学校の木のいちいちに霜の置く

備中も備前も梅の三分咲き

梅咲いて一枝岩に降る雨よ

蝶々や五重塔にまっはりて

春の日の吉備中山照らしける

陪塚に春の焚火の人の影

菜の花によく晴れてゐる吉備国

鴉の巣見ゆる備中へと入りぬ

さうさうに雨降ってくる木瓜の花

早朝の社に掃いて春落葉

止め置ける自転車籠に春落葉

花馬酔木滴つてをり今朝の雨

ふらこの少女に風が吹いてをり

裏木戸を出でて入りゆく春の園

いづこかに水の音して春の園

舳ひ船揺らししてゐたる春の波

川沿をゆきて桜の並木かな

朝がくるたびに見てゐる牡丹の芽

デコボンを母と分けあふ春の昼

風吹いて梅の香りの中に居り

梅林の風ならばなほ吹かれたし

青空に今咲きさうなミモザかな

いつもゆく道の大きな椿かな

春の空鶴つぎつぎと飛び交ひて

囀の道を隔てて聞こえけり

囀の道を行きまた戻りくる

この道のここにいつも囀りて

恋雀見上ぐる枝に鳴きつづけ

尉鶺鴒すぐ前に来てとまるなり

佐保光俊

村上正人

島尾ひとみ

放射状に光を放つ冬入日

マンションの窓ごとに差す冬入日

屋上の鴉飛び立つ春の朝

春風に鴉の群の飛び立てり

人住まぬ家に真白き椿咲く

紅茶飲む窓に見てゐる椿かな

春の日のベンチに座りお茶を飲む

春空へ二羽の川鴉の飛び立ちぬ

富士山の切手を買うて春の昼

川岸の葦の戦きて春の夕

秋沙

花見舟繫がれてをり錦川

花満ちて鶯の笛の横切りぬ

桜咲く島に大きな船造る

春告鳥けふも来てゐる朝かな

かしましく蛙鳴きをり雨上り

庭木切り枝にぶらつく小鳥の巣

手を上げて道を渡る子花水木

徳利に二本挿したる花薊

春草の名を言ひ当てて散歩せり

牡丹の最後の花の崩れけり

あざみ

あちこちに切り株ありて霞ぐもり

桜咲く山の公園工事中

満開の桜に止まり鳥の鳴く

蕾出づ洋服店のヒヤシンス

バスを待つ人と人の間春寒し

玄関の石段に落ち八重椿

あたたかや医師と笑顔で話して

無口な夫二階へ上る月朧

三人の速き連弾日永し

次々と募金する人春深し

亜矢

城跡に子らがしきりに土筆摘む

山鳩が奥から聞こえ花の山

床に就く義父に見せたる桜かな

花の頃そと直せる義父の夜具

病む人の寝息を聞いて春の星

介護せる我が手を見つめ春の朝

夫が隣ひ歩く稽古や散る桜

ひこばえや義父の生家に風通す

うららかや女学生らの大きな荷

琵琶湖よりゆつたり流れ春の川

ベンチから藪の初音のよく聞こゆ

春風や御仏映り水鏡

沈丁や母との話長くなり

図書館に鳥の聞こゆる春の午後

鯉に餌やれば寄り来る春の鴨

春の鶉の大橋くぐり海へ飛ぶ

新任地語る若さや春の夕

寺までは長き石段花まつり

堰落つる音のしてゐる春の川

木蓮や人の降りくる船着場

まづ神に詣でて初の漁に出る

春の野に牛の道あり阿蘇の山

早春の露の中にて火を焚けり

ひととせの命をつなぐ野焼かな

墓参りすればあたりに花の咲く

公園の桜に目白来てをりぬ

ひなげしの緑の草の中に咲き

山頂に立ちて雲海見下ろせり

あかときの朝顔まさに咲かんとす

湯豆腐の熱きに口の歪みたる

綾乃

井藤希

英一

暖かし甲高き聲近づきぬ

二の丸の白木蓮の散り始む

菜の花や手付かずの田がそこかしこ

いつの間に丘を越したり野の遊び

地下足袋も揃へてありぬ豆の花

菜の花や踏切に待つ人の列

物音のひとつもなく木の新芽張る

あの窓は音楽室よ春の昼

花蛇の飛び出して行く日差しかな

ここよりは字び合づく花水木

栄吉

残雪の四国カルスト越えて行く

古里の山に咲きけり土佐水木

はくれんが麓に咲いて荒瀬山

三極や人の住まはぬ庭に咲き

林道にときをり散つて山桜

滝しぶき届くところに桜咲く

桜かな青き空から散りゆくは

春風に舞ふ花びらを見上げたる

桜散る見上ぐる空に月懸かり

岬より太平洋へ春の虹

大畑恵

海原へ桜の吹雪く崖の道

たんぼぼがあちこち崎は海に落ち

山畑へ傾いでるたる大桜

咲くままに薺鋤かるる山の畑

てふてふの縫れてゐたり雨上り

かぎろひてトンネルまでの下り坂

寺町の路地に影してつばくらめ

石鹼玉人に離れて吹きにけり

ふらここを譲つてくれし男の子

近道は畦から畦へ麦青む

暁子

金縷梅きんるくの川辺をひとり歩きをり

枝分けて桜の下を通りけり

八十路なる夫の背中に花吹雪

リラ句ふテラスで友と紅茶飲む

診察を終へたる夕の殺雨かな

水芭蕉咲ける沼地を巡りたり

小手毬の花の生垣蜜蜂来

のどけしや公園の子の声高き

声色で本読みする子うらけし

爺と差し将棋に唸る春休み

すみれ

残雪の山に向き合ふ一日かな

春の雪こぼして進む貨車の列

そこだけは日の当たりをり花馬酔木

春落葉頻りにしたる花時計

途中下車して山桜見てゐたり

花を見る人の背中に朝日差す

鯉が背に花屑付けて沈みけり

海からの風に吹かるる石鹼玉

初めての道に見つけし豆の花

雨あとの空に咲きたる花水木

知佳子

芽吹きたる公孫樹並木を歩きをり

子とともに御室桜を巡りけり

親世音桜の中に立ちゐたり

八重桜間魔の前に咲きにけり

母が家へ行く道々に藤の花

故郷の蜂の羽音の聞こえけり

新緑の中を通りて母が家へ

母が家に代田の棚田見下ろしぬ

せせらぎを楓若葉の覆ひけり

山寺に白石楠花の咲いてをり

ちどり

庭のものみな生き生きと春時雨
叱られて子のブランコを立漕ぎす

大池の鯉を見てをり風光る

水を撥ね餌を呑み込み春の鯉

車寿から便りの届く花の頃

満開の花をバスから見えてをりぬ

傘のごと枝垂桜に潜り入る

一人でも二人でも善し花の宴

花びらを受けては投ぐる卒業子

ランドセル負うて見上げる大桜

雲雀

弁当の忘れて行かれ長閑なり

入学や関係なくて寝癖の子

旅の子が帰つてきそう朧月

春の宵倉庫に点くはずのない灯り

上気して打つ蕎麦の湯気春の風

行き止まり絡まる蝶を空へやる

春眠の布団と遊ぶ日曜日

口噤ぐ視線の先に残花なり

風光る十八歳の大人行く

壺焼が来て三人の笑い声

ふじ女

残雪の山を間近に立山線

はくれんの少しはころびかけの良き

摘草の人に日差の傾いて

雲行きて次の雲来る花菜畑

春の月自分の影を踏んでゆく

花の昼施設の母を連れ出して

花冷や水面に映る空と雲

枕木に絶え間なく降る花の塵

卒業の吾子の背中を見てをりぬ

新調の制服届く春の朝

松田裕子

竿を振る磯の背中に初音せり
 一声に足を止めたる初音かな
 雨止んで夜道に匂ふ沈丁花
 菜の花や一両電車に手を振つて
 掘割に芽吹き柳の玉すだれ
 きふ五羽けふは三羽と鶴帰る
 煙炭を鉢に混ぜ込む春の昼
 時々は日の差してくる花吹雪
 三人を拍手で送る卒業式
 行く春やまだ濡れてゐる水彩画

森口良樹

雲の煮き空広やかに囁りぬ
 緋桃咲く谷に流れの細くあり
 さざ波の右岸左岸は花盛り
 国道が向うに見えて花万朶
 しやばん玉ときをり流れベンチかな
 音立てて春の落葉のしきりなる
 ゆるやかに蹣跚の道の曲りたり
 栂咲いて蝶々高く来てをりぬ
 葉桜の中から不意に鳥の飛び

桑門わかこ

リラ冷えや乞われて燃やす古手紙
 吾が乗りし鞆今とは朽ち果てて
 誕辰に口いづばいの鰯寿司
 西へ行く飛行機雲や山蹣跚
 横たわる母の背薄し風信子
 浅利汁すすれば周防灘の風
 歯磨きのミント香るや夏隣
 快音の響く母校や夏近し
 てじてじと苺ジャム煮る朝かな

村上理江

土手に杖置いて土筆を摘みにけり

摘草に山羊の寄り来る山の畑

真つ直ぐに伸びて鉄路のかざろへり

花種を去年通りに蒔きにけり

車椅子車に乗せて花見かな

杖をつき桜の下に立ちにけり

岩布手に勝手口から友の来る

泣き止んで子の見つめたる石鯀玉

休ませる棚田にげんげ広がれり

山野ウタ

春の日の人影のなき棚田かな

牡丹の芽土の中より出でにけり

廢線の切通しより草萌ゆる

春の波漁村の瓦きらきらと

解体の家の小舞に春の風

振り上げし鍬の光なる桃の花

新庄憲彦

山門の礎の半ばに初音聞く

木蓮へ西に傾く日差かな

鉢植の薺の花が咲きにけり

ポケットに手を入れて見る柳絮かな

桜貝船通るたび波のして

大樟の春の落葉の掃かれをり

辻純江

まとまつた仕事とならず春ひと日

防風のひと皿のあるお肴かな

山葵漬浜のお客に用意して

山寺の帰りに持たせ屈など

蓬摘む予定を決める電話かな

紀英子

摘草のいつしか水の近くまで

歳時記のはころび直す弥生かな

桜土手ゆつくり進む車椅子

鳩雀鴉啄む春の芝

解散は天守としたる春の旅

高梨英子

元安の川面に映り花三分

駆けて来る下校子に春の虹架かる

桜貝拾ひて透かす春の虹

天道虫翅を広ぐる鈴の上

子螳螂草の中から録をよぐ

友岡葉山子

路地裏に春の風吹く猫も居て

一本の桜の下でランチかな

花の散る岸に雀が水を浴ぶ

赴任して雛罌粟を見る帰り道

上島康子

清明や正午の時報鳴り渡り

初花に目白のつがひ来てをりぬ

境内の枝垂るる花に頬がふれ

下枝の盛りの花にふれにけり

熊谷ゆり子

故郷の訛り聞こゆる花の下

花の下スマホをいぢる中学生

自転車の少年の背に花の散る

掃く人の向うに見ゆる牡丹かな

ちかこ

歌舞伎座の前に友待つ春の宵

夜の雨に大方散りぬりラの花

散歩道散り敷いてゐる桜蕊

山寺の日ごと伸びたる藤の花

撫子

香具山の坂を下れば紫雲英畑

持つてゆく夫の写真や初桜

初桜子らに買ひたる飴細工

高嶋絹代

龍天に登る水辺に人の声

花曇アルバム開く昼下がりに

下校子の声の賑はう四月かな

美耶

花の散る鳥居の前に写真撮る

師の庭に溢れてゐたり諸葛菜

遠藤さつき

彼岸入り蓬摘みつつ母思ふ

学校の大きな桜七分咲き

河原静子

花盛り車椅子押し回り道

春風に一步一步を立ち止まる

民

我が庭の木々の芽吹が日々の幸

八百屋には春の野菜があふれたり

津田玲子

今少し猫を抱き寄せ朝寝かな

スイートピー束ね帽子の鈐飾る

みさ子

空高く芽吹きて眩し木々の道

花の塵水路を覆ひ漂へる

やす保

盗蜜の落花をよけてシート敷く

花の下昨日と別の人座り

山崎桂子

球春や若き新星現れる

阿波久

令和四年三月度作品集より

秋沙 私の選んだ十句

春の雪しきりに降って大榎	佐保光俊
白梅に注ぐ日差の柔かさ	村上正人
涙をゆく吾に付き来る冬鷗	高尾ひとみ
日を受けてゆつくり落つる春の雪	亜矢
点滴の滴りに差す春日かな	綾乃
時どきは遠き山見て春耕す	曉子
目をやれば連山薄く霞みをり	すみれ
朝からの雨降り止まず花辛夷	知佳子
川底の日の斑の揺らぎ春の昼	山野ウタ
春の瀧細き氷柱の奥にあり	新庄憲彦

亜矢 私の選んだ十句

我と木の間に降って春の雪	佐保光俊
温泉のけむり流るる残る雪	綾乃
春の夕日だまりに鶺鴒の動かざる	井藤希
開け放つ体育館に春の風	栄吉
山道に鳥声近し春の風	雲雀
雪の降る中まっすぐに雀来る	松田裕子
咲くもあり蕾もありて梅の谷	新庄憲彦
汽笛鳴る名残の雪の向う側	村上理江
春の空鉛筆置いて見上げをり	阿波久
人去りて梅の香りの濃くなりぬ	ちかこ